

Carl Diem の世界スポーツ文化史の研究 (4) - 近代初期ヨーロッパの場合 (3) イギリス -

加藤 元和 *

Carl Diem's study of the "Weltgeschichte des Sports" (4)

- On the European Sports culture in the first stage of modern Ages (3) England -

Motokazu KATO*

Accepted November 2, 2005

抄録：本論は「Carl Diem の生涯とスポーツ・体育思想」研究の一環の範疇に入るものである。今回は、彼の著作「Weltgeschichte des Sports」(1960, 1223頁)の1巻4部の「Europa von den Germanen bis zur französischen Revolution」(443-578頁)の中から、近代初期における「England」(503-519頁)のスポーツにスポットを当てて追究する。Diemは近代初期のイギリスのスポーツを追究するに当たって、特に、次の様な独自の特徴や質的長所に視点を据えて追究している。

-) 教育とスポーツ文化
-) スポーツ禁止と弓射の奨励
-) ボールゲーム (テニス, フットボール)
-) トーナメント
-) 水泳
-) 国王のスポーツ法令

索引語：Carl Diem, イギリス, スポーツ文化

Abstract : This paper is a study of "Carl Diem's Life and Sports Philosophy", especially through English sports in the "Weltgeschichte des Sports". This study makes clear a special feature of the basis of the following six investigative points:

- 1) Education and Sports culture
- 2) Sports prohibition and promotion of Archery
- 3) Ball-games (tennis, football)
- 4) tournament

* 京都教育大学名誉教授

5) swimming

6) The King's Declaration of the lawfull Sports

Key Words : Carl Diem, England, Sports culture

結

本研究は「Carl Diem の生涯とスポーツ・体育思想」研究の一環の範疇として追究した。先行論文、イタリア、フランスの場合に続いて、彼の著作「Weltgeschichte des Sports」(1960, 1223 頁)の1巻4部の「Europa von den Germanen bis zur französischen Revolution」(443-578 頁)の中から、わが国ではあまり知られていない、近代初期における「England」(503-519 頁)のスポーツ文化史にスポットをあてて追究する。

先行論文でも触れておいた様に、Diem は近代初期におけるイギリスのスポーツ文化を追究するにあたって、特に、その独自の特徴や質的長所に研究視点を据えて解明している。

本論でも、Diem の「イギリスのスポーツ文化の史的追究」に倣って、

-) 教育とスポーツ文化
-) スポーツ禁止と弓射の奨励
-) ボールゲーム(テニス, フットボール)
-) トーナメント
-) 水泳
-) 国王のスポーツ法令

の6点に、論点をしぼって追究したい。

本論

「イギリスは、一般的に、スポーツの発祥の地と目されている。このことは、イギリスが身体運動に対する普遍的な人間的喜びに秩序や規範をもたらしたという限りで、当をえている。」という見解で、Diem はイギリスの章を始めている(503 頁)。

スポーツ文化の展開・発展には、多くの生存状況が寄与していたと思われるが、この点について、Diem は、イギリスの気候、風土とノルマン族の征服後、他民族の侵入を免れた島国的立地条件を挙げると共に、特に、イギリス人特有の人的・民族的条件を強調している。

「海洋民族のイギリス人は、世界に対して進取的で、同時に自己表現感情が強い。海を征服することがどれほど『スポーツ文化の交流』を促すものであるか。同時に、市民と貴族の気晴らしが繁栄したのも、身分相応の親和的理解があってこそのことなのである。」(503 頁)と Diem はイギリス人の特性を説き、続けて、イギリス人の歴史全体に流れる「コモンセンス」に注視している。

「コモンセンスが、原則的なことに囚われて、にっちもさっちもいなくなったり、一時的な興奮や感情に、無批判に溺れることから、この民族を守ってくれているのである。生存への知恵は、イギリ

ス人にも欠けていなかった。あまたの対立を和らげ、形式に囚われず、法律が否定する場合でも、上質の正義感を、断固として決断しうることに培ったのである。こうして、イギリスには、フェアの概念が生まれたのであるが、この概念は『晴朗な』という言葉の意味通り、人間の生活、それも単にスポーツ生活ばかりでなく、生活全般を晴朗にしてくれるのである。」(503, 504 頁)と、イギリス人の内面的特性について説いている。

1) 教育とスポーツ文化

Diem は「イギリス人は寄宿教育に対して、古来からの、独特の、ある種の巧利さから生まれた親愛を育んできた。すなわち、『里子制度』である。既に、伝承の中で、子弟たちが祖父母やその他の近い他人のもとに送りこまれることを知るのであるが、つまり、これはドイツの貴族の子弟なども、親しい騎士の館で教育されたのとよく似ている。諸王すらも子息らを、自分の宮廷では育てず、いずれかの領封の適切な人たちに子息らの教育を委ねたのである。こうして、イギリスでは、息子たちが当然の様に、両親と生活を共有する形態とは異なった、至極深奥に迫る教育理念が発達したのである。

こうした形態と太古以来のケルト・ゲルマン民族の遺産の 1 つである遊びへの好みとが実生活の規範の中で結びつくことになった。他国と異なって、イギリスの偉大な教育者たちは、誰一人として、身体教育を軽視した人はいなかったのである。そして、このことは大部分の人文主義者の著作に認められる学問的立場からの推奨であったばかりでなく、結局のところ、イギリス人の生活実践の一部だったのである。こうして、スポーツ文化は絶えず、精神的なものから影響されてきたのである。」(504 頁)と説明し、教育とスポーツ文化との結び付きの端緒として、古来からの「里子制度」から発展した「寄宿教育」に着目している。これは、更に、現在にも存続するパブリック・スクールへと展開して行くのである。

スポーツ文化と教育とを結び付けた思想家のトップに立つのが、フマニストでドクターで、外交官であったトーマス・エリオット(Thomas Elyot, 1490 ~ 1546)である。

Diem は「彼はローマ・ヘレニズム期の医師ガレノス(Galenos, 129 頃 ~ 200 頃)を翻訳し、そこから出発した。そして、それを手本に、特別の養生論を著し、更にヘンリー八世(Henry , 1491-1547)に献じた主著『為政者論』(The Boke named the Governour, 1531)の中で、身体運動の全カタログを作成したのであるが、いずれにしても、石投げやフットボールのような『農民的』運動はカタログから除外したのである。彼は、『イギリス教育の父』と目され、その影響は極めて大きく、以後の教育家で、身体運動を軽視した人はいない程であった。」(504 頁)と解説しているが、なぜ、石投げとフットボールを除外したかについては明示していないのである。エリオットの著作自体の性格が為政者の教育を目指すものであったので、農民的娯楽としての石投げやフットボールを、品位なきものとして除外したのであろう。

つぎに、Diem はエリザベス一世(Elizabeth , 1533-1603)の家庭教師兼侍講であったロジャー・アスカム(Roger Ascham, 1515-1568)を取り上げる。

「彼は、弓術に関する最高の著作『トクソフィルス』(Toxophilus, toxo はギリシア語で弓, philus はギリシア語の Philos のラテン語化で、愛好者の意。1545)を著し、それより 25 年後には、この弓を用いる運動を、ハロー校(1571 年創立)の創立文書の中で、同校生徒の必修科目として位置づけたのである。アスカムは、またその著『The Schoolmaster』(1570)の中で、どの生徒も、14 歳から徒競走、跳躍、水泳、レスリング、フェンシング、乗馬、槍突き、弩射、鷹狩、ボールゲームなどで鍛錬するこ

との必要性を強調した。」(504, 505 頁)と Diem は解説している。したがって、アスカムは寄宿制度的パブリック・スクールの教育とスポーツ文化とを関係づけた先駆的人物とみなすことができよう。

最後に登場するのがリチャード・マルカスター (Richard Mulcaster, 1530-1611) である。

Diem は「マルカスターは、当時イギリスのあらゆる教育家の中で、おそらく最も情熱的に、スポーツ文化の価値を強調した人物であり、しかも自ら、実例を提示した人物でもあった。彼は自分がスポーツを愛し、高齢に至るまでスポーツに忠実であった、と告白している。彼は自身の立派な体格と熟練を、その様な恒常的『修練』と『パスタイズ』に帰し、そのために長いリストを作っている。すなわち、歩くこと、走ること、跳ぶこと、水泳、乗馬、狩り、弓射、ボールゲーム(またしてもフットボールは除外である)、そして冬季にあっては、フェンシング、レスリング、舞踊である。彼は『論集』(Positions, 1581)を書くに当たって、ヒエロニウムス・メルクリアリス (Mercurialis, 1530-1606) の権威に依存し、恐らく、ヴィヴェス (Vives, 1492-1540) の影響も受けていたのであろう。」(505 頁)と明示している。Diem に拠れば、マルカスターもまた先人の文化人・教養人たちと同様、フットボールを、軽視、排拆していると解釈しているが、彼は当時の乱暴この上ないフットボールを批判しているのであって、人数制限とか適切な規範の設定によって、フットボールの改革を意図していたのが本当の処である。

エリオットやマルカスターの活躍した時代には、既存のパブリック・スクール、ウィンチェスター (Winchester, 1382 年設立)、イートン (Eton, 1440 年設立) に続いて、ウエストミンスター (Westminster, 1560 年)、マーチャント・テーラーズ (Marchant Taylors, 1561 年)、ラグビー (Rugby, 1567 年)、ハロー (Harrow, 1571 年) などの大規模なパブリック・スクールが誕生した。これらの学校は等しく、イギリススポーツ文化の温床であり、育成の場となった。この点に関して、Diem は次の様に言う。

「これら学校の『プレイの態度』は同時にイギリス人の生活の特徴づけた。ウエリントン公 (Wellington, 1769-1852) によるワーテルローの勝利 (対ナポレオン) はイートン校のグラウンドで勝ち取られたのだ、という人口に膾炙する言葉は一般化されてよからう。これらの学校では『コモンウエルス』の基盤を築いたイギリス人が育成され、衣食住、生活習慣、人生の困難の克服など、以後の世界の大部分が現代に至るまで、こうしたイギリス人を模範としてきたのである。」(505 頁)と最大限に激賞している。

II) スポーツ禁止と弓射の奨励

古来からイギリスには組織的な育成は論外として、貴族や農民層の間に、スポーツ文化に関する伝承がある。角力、石投げ、弓射、狩猟、水泳、ボールゲームなどが古い詩、説話などの中で言及されている。しかるに、イギリスのスポーツ文化に関するより厳密な知識は 12 世紀になってようやく始まるのである。

1174 年に、聖トマス・ベケット (St. Thomas à Becket, 1118 頃 -1170, カンタベリー大司教) の書記であったウィリアム・フィッスティーブン (William fitzstephen) は「聖トマスの生涯」の前半に、当時のロンドンの生活を記録した。それに拠ると、Shrove Tuesday には、町の少年たちが Fighting-Cock を持ち寄り、午前中ずっと Cock-Fighting を楽しみ、午後には、野外や路上でボールゲームを実施する。こうして少年たちが祭日を利用して、素朴で荒々しいゲーム熱を冷しているのを、親たちや閑暇な富裕者たちは、各々騎馬や徒歩で観戦に出かけ、共に大いに楽しんだ、と言うことである。

Diem は「イギリスにおいて、スポーツがいかに広く普及し、異常に過熱していたか。100 年ばかり

後ではあるが、我々が既にフランスについて知ってるように、間もなく出されたスポーツ禁止令がこれを証している。理由としては、所謂ゲームが公共の治安の維持と武術への関心を逸しかねないという支配者たちの危惧であった。」(506頁)とし、キリスト教的祝祭と結びついたスポーツ文化の隆盛に対して、支配者たちは治安維持と武術、特に弓射の奨励とを理由にして、スポーツを禁止したのである。この点に関して、Diem は、

「14世紀中頃には、エドワード三世(Edward , 1312-1377)の勅令で、ロンドンの治安判事は特定のゲームを禁止し、それに代わって、弓射を義務とする様命じられた。禁止されたのは『石投げ、丸太投げ、鉄盤投げ、ハンドボール(テニスの祖型)、フットボール、木球戯、そしてガリア人の格闘技(馬上槍試合のこと)』などであった。こうした禁止令はリチャード二世(Richard , 1367-1400, エドワード三世の孫)のもとで、1388年に繰り返され、『手・足を用いるボールゲームやその他のボールゲーム、木球戯、石投げ、鉄盤投げ、サイコロ遊び、石投げ遊び』などに向けられた。」(506頁)と、勅令に基づく禁止令について説明しているが、その中心にあったのはボールゲームであったのである。Diem は、14世紀の実例しか執り挙げていないが、実際には15・16世紀にも、しばしば勅令をもって禁止令が出されていたのである。

先述のフィッステーンによれば、夏祭りでは、色々なスポーツがやられたと記している。すなわち「In festis tota aestate iuvenes ludentes exercentur, arcu, cursu ,saltu ,lucta, iacto lapidum, amentatis missilibus ultra metam expediendis...」(507頁、夏の祭りで、若者たちは楽しみながら稽古する。弓、徒競走、組み討ち、跳躍、石投げ、投石器など...)である。

また詩人チョーサー(Chaucer, 1340-1400)は徒競走について、「Yif a man renneth in the Stedye (or in the forlonge) for the corone, thanne lith the mede in the corone for which he renneth」(506頁、参加者がスタジオン(あるいは長い走路)を月桂冠を賭けて走る時、賞品は彼が勝ちとらんとするこの月桂冠なるぞ。)と言っている。即ち、ギリシア的名誉への賞賛を歌っているのである。

こうしたスポーツ文化の中で、特に諸王に拠って、あらゆる手段で奨励されたのが弓射であった。

Diem は「最初、アングロサクソン人の弓が主流で、後にノルマン人の弓が使われ、遂に弩が弓に替わったのである。弓の長さはその使用者の身長に合わされた。射士はヘンリー三世(Henry , 1207-1272)のもと、セント・ジョージ兄弟団を結成した。彼らは様々な特権を享受し、事故が発生した場合には保障年金が与えられた。特製の的台の上には、先端に的や鳥模型(鳩や雄鶏)を取付けた竿が立てられ、近距離やかなりの遠距離から射られた。イギリスの諸王、特にヘンリー七世(Henry , 1457-1509), エドワード六世(Edward , 1537-1553), チャールズ一世(Charles , 1600-1649)などは自分たちの弓術の腕前を称賛されたがった、と言われている。」(508頁)と説き、イギリスの諸王は当時の軍事力の中核を形成していた弓射や弩射の充実を企図して、盛んに国民の弓射を奨励、鼓舞したことについて取りあげている。

Ⅲ) ボールゲーム(テニス、フットボール)

近代的あるいは現代的スポーツ文化の中心はボールゲームであると思われるし、スポーツ文化の近代化を特徴づけたのもボールゲームだと考えられる。先行論文のイタリア、フランスのスポーツ文化でも、ボールゲームが特徴的であった。

Diem もイギリスのスポーツ文化の中心として、このボールゲームを取りあげている。「イギリスでは、ボールゲームは古来から最も重要な意義を持っていたと思われる。最も古いボールゲームは一個

のボールを互いに手で打ち合うハンドテニスであった。このゲームは『fives』と呼ばれたが、それは手の5本の指でなされたからであり、あるいは5人のプレイヤーでプレイされたからであろう。ラテン語では『pila manualeあるいはpila manualis』(手の毬戯)といい、フランス語では『pelotes i meyn』(手のペロタ遊び)と言った。やがて手を保護するグローブが登場すると、そこから『グローブ・ファイブス』が生まれた。グローブから打球具までの道程はイタリアやフランスと同様僅かな歩みであった。

人々は木製の打棒でボールを打った。最初のゲーム名を『club-ball』と呼び、ゲームの規則が作られた。1基の三脚型の標的(ベースあるいはゴール)が守られた。それから、ゲームは『stool-ball』と呼ばれた。最後には、イギリスでは『クリケット』、アメリカでは『ベースボール』の呼称が見出されたのである。湾曲した打棒から『ホッケー』が生まれた。

掌を広げた形の打球具で、掌と同様に弾力的なものは、既に14世紀に知られていた。チョーサーは『playn raket』と言い、『tenessyng, handball, football』を区別している。フランス語からの単語2語の借用は、このゲームの洗練化がフランスからやってきたことを物語っている。即ち『playing at the palm』は『la paume』から、『tennis』は『tenez』から生まれた言葉で、古フランス語の発音では語尾の『z』が発音されたのである。(510頁)とDiemはイギリスにおけるボールゲームの形成・発展の流れについて概説している。

Diemの解説の中で、確認しておきたいことはフランスの「pelota」とは、元来ピレネー山脈のバスク族が愛好していたボールゲームで、かのフランシスコ・ザビエルが日本にも紹介していたゲームであった。

「club-ball」と「stool-ball」の差異は、攻撃用の打棒「club」をゲーム名としたのと、守備用の拠点「stool」をゲーム名としたのとの差異である。

ラケットは手の延長であり、バットは腕の延長である。では湾曲した打球具はなにを意味するのだろうか、と問えば、それは足の延長を、手に持って打球具とした、と推測できるであろう。ホッケーのステッキ、ポロのマレット、ゴルフのクラブなどはこの範疇に入るであろう。

Diemは、フットボールについて、「フットボールは元来手でも足でも前方へ運んでいいボールの奪い合いに他ならなかった。残酷な事例はノルマンのバイキングのことで、彼らはイギリスの沿岸を略奪して船へ引きあげる途中、不運な住民の切り取った頭でフットボールに興じた、と伝えられている。」(511頁)となんとなく怪奇な伝説で、フットボールの解説を始めているが、これは洋の東西を問わず伝説化されている類似のフットボール起源説に由来するものである。

続けてDiemは「北部フランス、イングランド、スコットランド、アイルランドの文献的史料は一致して、祝日、特にカーニバルでの様々なボールゲームについて報告している。チェスターでは、古来のゲームで、囚われたデンマーク人の頭が使われたと言われている。元来、ゲームは飛び入り勝手であった。即ち、ある村の男子住民と隣村の男子住民との対戦、女性対女性、既婚者対未婚者、同等の身分の者同士の対戦などもあった。初期には、上流階級の参加もあったが、やがて参加しなくなった。それぞれ200人あるいは数百人の参加者が対戦することも稀ではなかった。」(511頁)と解説し、フットボールの初期の頃は色々な集団の対戦があり、参加条件に適い、参加意欲さえあれば、誰でも参加しえたのである。

続けて、Diemはゲームの進行について解説している。

「ボールは空気で膨らませ、革で縫合した膀胱であった。ボールは対戦相手の村に運ばれ、周知の樹

木, 例えば市場の木に運ばれねばならなかった。大抵は村の入口が『ゴール』だったが, 時には小川の岸にゴールがあったりした。こんな場合には, 対戦は川の中でも行われ, 互に相手を水中へ沈め合うこととした。そんな場合, 古い年代記にあるように「胛骨を骨折したり, 頭部に怪我を負ったり, 衣服はずたずたになったりした。」(511 頁) この様に試合では, その時々, その場所に応じて, ゴールを決め, ゴールにボールを運び込むために, 力一杯, ボールの争奪戦を展開するのが常であった。

更に, Diem は「商店主たちは, 粗暴な若者たちが町中に殺到して来ると大急ぎで店を閉めた。『ボールのある処, すべてフェアなのだ。』それ故, エドワード二世(1284-1327)は, 既に1313年ロンドン市内でのフットボールを『市内の大騒動, 幾多の邪悪が発生し, 神が禁じ給う, 大きなボールを奪い合うことによって生じる犠牲』の故に, 禁止したことは頷けるのである。

ボールは足で蹴られたり, 手で掴まれたが, 相手がボールを持った場合には, 追跡し, ボールを奪い取ろうと試みたのである。

1314年頃, ロンドン市長ニコラス・ファーンドン(Nicholas Farndon)の布告によって, ロンドンの広場でのフットボールが禁止された。禁止は1365年, 1372年にも繰り返された。」(511 頁)と説明し, 街中でのフットボール戦の狂暴さの故に, 度々出された禁止令の発布について明示している。

禁止の対象となった当時のフットボールの特徴について, Diem は次の様にまとめている。

- 1) ゲームは年に1回しかやられなかった。しかも「2月2日の聖燭祭」と5月1日の間の盛大な祭日の1日に行われた。
- 2) 地域に2つのチームが作られた。例えば, 未婚男性チームと既婚男性チームである。参加者の数には制限がなかった。
- 3) 元来, 鋸屑を詰めた革製のボールはしばしば著しく大きく, 飛ぶというよりも, 転がったのである。ボールは街の中央, 大抵, 教会の広場に置かれ, 全身で突いたり, 蹴ったりしてよかった。
- 4) 試合の開始は大体午後の2時で, 日没まで続けられた。
- 5) 試合の目的はボールを相手のゴールに「運びこむ」ことであった。ゴールは周知の様に, 東方(日の出の方向)と西方(日没の方向)であった。
- 6) 勝ったチームはボールを保管する権利を有した(持ち回り賞に似ている)。
- 7) ゲームが漸次, 野原に移されるようになると, 2カ所のチームの試合も可能になり, 都市の城門に倣って, 2つのゴールを備えたゲーム場が出現した。この様な「球場」は12世紀の末, イギリスの詩人ラーヤモン(Layamon, 年代不詳)のアーサー王物語(伝説的王 Arthur)にはじめて言及されるが, 500年頃とされるアーサー王の時代に, 既にこうした「球場」があったかどうかを実証するものではない。」(512 頁)

エリザベス女王は1577年にケニルワースで, フットボールを含めた大規模な「スポーツ・パスタイムズ週間」(week of sports and pastimes)を開催しているが, 同時代のシェイクスピア(1564-1616)もしばしば自分の作品の中で, フットボールについて取りあげている。

Diem もまたシェイクスピアの作品の中から, いくつかを援用している。

「The Comedy of Errors」の中では,

「Am I so roond with you, as you with me,

That like a football you do spurn me thus?

You spurn me hence, and he will spurn me hither;

If I last in this service, you must case me in leather.」(512 頁)

「あたしはそんなにすねていますかね。

あなたのすねの方が大変な代物だ。

なにしろ、そのすねで、あたしをフットボールの様に蹴とばすんだから。

あなたが、あっちへボンとぶっと飛ばす。

旦那さまが、こっちへボンとぶっとばす。

あたしは、そのうち、フットボールのボンコツになろうってわけだ。」

と、仲の悪い主人夫妻の間で、フットボールよろしく、脛でこずかれ、ボンコツと化す召使のことがおもしろ、おかしく語られている。

「King Lear」の中では、

「Lear: Do you bandy looks with me, you rascal? (striking him)

Oswald: I'll not be strucken, my Lord.

Kent: Now tripped neither, you base football player? (tripping up his heels)」(513 頁)

「リア：睨み返すのか、こいつ？(相手をなぐる)

オズワルド：殴られ放して黙ってはおられませぬ。

ケント：その上、足を払われ放しでは黙っておれまい。この蹴鞠野郎。(その足を掬う)」

と比喩的に用いられたりしている。

Diem はフットボールの解説を、次の様な詩で結んでいる。

「Shrove Tuesday, you know is always the day, When pancake is the prelude and football the play.」(513 頁)

「告解の火曜日。お前たちも知るように、いつでもパンケーキが序幕を、そして、フットボールが本番劇を演ずる日。」

これは 19 世紀のある詩句であるが、古来からイギリスでは、キリスト教の祝祭 Shrove Tuesday に、教会公認として、よくフットボールが楽しまれていたことを表現しているのである。

Diem はイギリスにおけるテニスの流行、発展の糸口についてまず触れて、

「疑いもなく、テニスは(フットボールに較べて)いささかお上品であった。そして、その発展・普及もフランスのそれと一致している。テニスはイギリスで生まれたのか、それともノルマン人から継承したゲームであるのか、これは至極不明確である。いずれにせよ、閉ざされた空間、つまりボールハウス(コート)で行われたこのゲームはフランスからやってきたに違いない。それも最初、上流階級の特権であった。身分の低い市民階級は国王の勅令によって、ボールハウスに立ち入ることが禁止されていた。テニスは、スコットランド国王アレキサンダー三世(Alexander , 1241-1286)の治下、母方のフランス宮廷人たちによって移入されたと言われている。」(513 頁)として、フランス宮廷人からの移入説を有力としている。

しかし、イギリスにおける独自の展開として、Diem は「1400 年頃、テニスはチャーサーの同時代人、イギリスの詩人ジョン・ガウアー(John Gower, 1325-1408)のバラードに現れる。『praise of peace, of the tennetz to winne or lose a chase mai no lif witeer that the ball be ronne.』(テニスでは、チェースの勝敗はボールが飛んでくるまでは、誰にも分からぬもの。)

かのシェイクスピアでも『ハムレット』や『ヘンリー四世』に tennis のことが登場する。」(513 頁)と、イギリスの教養人たちも取りあげていることに触れ、更に、王室、貴族を中心にした、テニスの普及について解説する。

「15世紀の初頭、スコットランドのジェームズ一世(1394-1437)は『at the pawne』(テニスコートで)でゲームを楽しんでいるし、その後、王室には、既に4つのゲーム・ハウスが確認されている。またウィンザーとオックスフォードには、出入り自由のゲーム場もあった。

ヘンリー七世(Henry , 1457-1509)は一般市民を排斥したが、自身は熱心な実践者であった。そして、王室の出納記録によれば、彼は日曜日にすらプレイしたのである。この点は、ヘンリー八世(1491-1547)も同様で、幾つかのボールハウスを建てたが、そのうち1529年建造のハンプトンコートは今日まで存続している。」(514頁)

ここで確認しておきたいことは、チューダー朝期には安息日である日曜日には、労働したり、娯楽を楽しんではいけないことになっていたということである。

Diemは「1522年、カール五世(Karl , 1500-1558, 神聖ローマ帝国皇帝)がイギリス滞在の砌に催された『真に盛大なゲーム』について、ホールは次の様に報告している。『土曜日、ヘンリー八世とカール五世はオレンジ公(The Princes of Orange)と辺境伯アルベルト・フォン・ブランデンブルク(Albert Markgraf von Brandenburg)を相手にコートでテニスを行った。組んで2手に分かれて、11ゲームを行って、十分に楽しんだ。』

また、ヘンリー八世は、その治世8年目に、皇帝マクシミリアン(Maximilian , 1459-1519)と組んで、オレンジ公と辺境伯フォン・ブランデンブルクとを相手にダブルスで試合をしている。」(514頁)と、イギリス王家・貴族と大陸の王室・貴族とのテニスの交流について言説している。エリザベス一世の父ヘンリー八世もなかなかのテニス好きであったことが分かるのである。

イギリスの王侯・貴族にとっては、テニスは社交の場であると同時に、子弟の教育・訓練に必須不可欠のものであった。この点について、Diemは「ジェームズ一世(James , 1566-1625, 1603年イングランド王を兼ねる)は自分ではテニス・プレイヤーではなかったが、子息ヘンリーを特に慎重に、スポーツを通して教育した。王は王子の教育に関する教えを、スコットランド王時代に『*... sive regia institutio ad Henricum Principum*』(バシリコン・ドーロン、皇太子ヘンリーのための帝王学)として書き下ろした。1599年、ラテン語で出版され、1603年に母国語で出版された本書は、その時代、特に教育理論に多大の影響を及ぼした。王たるものは、身体的にも、軍事的にも人の上に立たねばならず、したがって、乗馬、ランニング、跳躍、レスリング、フェンシング、羽根つき、ペルメル、槍投げ、舞踊、狩猟、鷹狩りなども稽古せねばならぬ。これに対して、『フットボールの如き粗暴な運動』は実施してはならない、としている。

王の命令によって、王の礼拝堂付き司祭ジェームズ・クリーランド(James Cleland)も貴重な書物を著した。それが1607年、オックスフォードで出版された『The Institution of a Young Nobleman』(青年貴族の慣例)である。この書には、宮廷での見聞だけでなく、エリオットやマルカスター、特にモンテーニュ(Michel de Montaigne, 1533-1592)の考え方も反映していた。

ジェームズ一世の後継者チャールズ一世(Charles , 1600-1649)は既に若きプリンスの時から、ゲームに熱中していた。この王がラケットを手にした姿は早朝6時には早々と眺めることができたのである。チャールズ二世(1630-1685)もしばしばテニスのゲームで政務の疲れを癒し、王室年代記が語るように、特製のスポーツ着を仕立てさせたりしていた。

この時代、偉大なイギリスの哲学者で、政治家のフランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)は、1623年に出版した『De dignitate et augmentis acientiarum』(学問の価値と偉大について)の中で、身体運動で治せぬ病気は殆ど発見できない、と説いた。」(514・515頁)と解説している。

17世紀には、テニスはやがて、王侯・貴族の庭園ばかりか、大学構内にも普及していった。

この点について Diem は、

「テニスは17世紀を通じて、フランスにおける発展と平行して、ますます人気が出た。当時、ロンドンには14のボールハウスがあり、パリにはなんと114もあったのである。テニスをしたのは、特に貴族と学生であった。1675年のオックスフォード大学の図面は2つのボールハウスの所在を示しているし、ケンブリッジ大学の同様の図面には6つのボールハウスを認めた。下って、1887年には、前者には1つ、後者には3つを残すのみとなっていた。」(515頁)と説き、オックスブリッジの学生間にもテニスの普及していたことを明示している。

19世紀の後半には、ウィングフィールドとその仲間たちに拠るローンテニスの考案と工夫と共に、ボールハウスは消滅して行くのである。

ここでも確認しておきたいことは、近代初期のボールゲーム、特にテニスの発展・普及には、Diemの見解の様に、王侯・貴族や学生の関与も重視されてよからうが、その先駆的役割を果たしたのは修道院で日夜研鑽を積んでいた修道士たちで、彼らが修業の閑暇に、楽しみ、そして創意工夫を凝らしたことに拠るのである。この点がDiemには欠落していると言えよう。

IV) トーナメント

イギリスのスポーツ文化にもまた他のヨーロッパと同様、トーナメント(Tournament)があった。その形式はフランスやドイツのそれと差異はなかった、とDiemは説きはじめ、続けて、

「最古の報告も、フランス人とイギリス人の騎士たちの出会いを語っているが、しかし最初はフランスでの出会いであった。イギリスでは、そもそも諸王ははじめトーナメントに反感を抱いていたように思われる。」(515頁)とし、当初は人気のスポーツ文化ではなかったらしい。

「イングランド王スティーブナー世(Stephan, 1135-1154)は自国でのトーナメントを禁じていたが、フランスを訪れた時、トーナメントを観戦した。兎角するうちに、自国ではあらゆる類いの仮名で、騎士の催物が蔓延していった。ヘンリー二世(Henry, 1133-1189)は改めて、トーナメントを禁止したが、その根拠としたのは、自分の息子が『Conflictus Gallici』(ガリア人の闘技)で大金を浪費したからである。」(515頁)として、トーナメントの禁止について解説している。

しかし、大陸、特に、フランスでトーナメントが流行していたので、イギリスでも採用せざるをえなくなったとし、Diemは、「トーナメントを導入したのは、リチャード獅子心王(Richard, Lion-Hearted, 1157-1199)が最初で、それも異国の騎士の優勢を恐れたのが第一の理由であった。彼は自ら、トーナメントの試合場を設け、友好的に試合が運ぶように、様々な規定を布告した。彼は参加者から参加費を徴収した。伯爵から20金貨、男爵から10金貨、地主の騎士から4金貨、そして無産者から2金貨であった。

ロンドン王立図書館所蔵の、こうしたトーナメントの絵画から、外観も大陸のものと似ていたことが明らかである。以来、大規模なトーナメント大会が王室自体によって催されたのである。それは旗やファンファーレ、各種のセレモニー、装飾、手に汗を握るような試合をともなった大規模な見世物を提供するものであった。しかし16世紀の末から、トーナメントは稀になり始めるのである。」(515・516頁)と記述し、イギリス王家が率先してトーナメントを主催したことについて解説を加えている。

近代初期には、トーナメントは騎士の交流の場でもあり、国際的交流の機会でもあった。

Diemはこのことについて、

「トーナメントの規則はフランスのそれと合致する。それどころか、フランス語の合図や指令がそのまま用いられた。例えば『Laissez les aler』は(騎馬を突進させよ)の指令であった。『Joute』は Just (Joust, ジュースト)あるいは lancegame (槍試合)の意味であった。

ヘンリー三世(Henry ,1207-1272)の治下、トーナメントでしばしば試合をした騎士の兄弟団は共に円卓を囲んだが、身分的差別はなかった。この兄弟団の創始は伝説に満ちたかのアーサー王に帰せられた。

1280年頃、富裕なロジャー・ドゥ・モーティマー(Roger de Mortimer, 1287頃-1330)は一大トーナメントを催したが、それには円卓の騎士100人が招待されていた。この大会は国内外の耳目をそば立たせた、と言われている(モーティマーの生年と照合すれば、1280年頃としているのはDiemの読み違いか書き違いであろう。)

エドワード二世(Edward ,1284-1327)は1322年、再度、トーナメント、槍試合修業、冒険騎行などに禁止令を出したが、永続的效果はなかった。それから30年後、エドワード三世(Edward ,1312-1377)はウィンザーで、至極大規模な騎士の円卓のための大会を催した。これは、明らかに魅力的だったので、フランスでは国王フィリップ六世(Philippe ,1293-1350)に拠っても、この様な兄弟団の結成が継承された。当時、トーナメントは、ドイツ、イタリア出身の多くの騎士をイギリスに引き寄せたと思われる。」(516頁)と簡明に解説を加えている。

V) 水泳

歩、走、跳、投と同様、水泳、水浴は四面海に囲まれたイギリス人の間では、わが日本人と同様、有史以前から、生存・生活の中に、確固たる地歩を築いていたであろうことは想像に難くない。しかし、明示的に、水泳がイギリス人の中で記録されたのは近代初期に成ってからのことである。

「14世紀には、既に、水泳教師についての言及がある。絵画を見ると平泳ぎとクロールの一種があったと考えられる。同様に、飛び込みも描写されている。水泳の稽古は船乗りと漁師の民にあっては必要不可欠のものであった。だから既に、古来から、溺死する前に身を守る術を、如何に学ばねばならないか、の幾多の指針があった。」(517頁)とDiemはイギリス人における水泳の必然性について触れ、続けて、青少年の教育の中でも問題になり始めたことについて、

「水泳が青少年教育の一環として登場するのは、ずっと後のことで、フィッスティーブンの記録にはまだ挙げられておらず、アスカムやマルカスターのような16世紀の教育者がそのプログラムで水泳について言及し始めてからである。その後1587年、したがってアウグスブルク(ドイツ)で、人文主義者ニコラウス・ヴィンマン(Nikolaus Wynmann)の指導書が出版されてから丸50年後、エバラード・ディグビー(Everard Digby)の『De arte natandi libri duo』(水泳術に関する書、1587年)が出版された。著者の人文主義者としての品質を明示する様な序文に続いて、俯瞰的な水泳の教示が43の木版画に拠って描かれ、個々の泳法が詳述されている。ディグビーが特に推奨したのはヴィンマンとは異なり、背泳である。潜水の教示でも、彼は、かのドイツ人の先達よりも遥かに進歩的で詳細である。本書の感化は大きく、ヘンリー・ピーチャム(Henry Peacham, 1576-1643)は1622年に出版した『Compleat Gentleman』(紳士大全)の教養の中に水泳を含め、精神は、身体の力と運動とに拠って、その力と活発さを獲得せねばならないのだ、と教示的原則を示していた。更に、ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin, 1706-1790, アメリカの政治家、科学者)ですら、自分の優れた水泳術を、遠く離れたアメリカで、1696年のテヴェノー(Thevenot)によるディグビーの書のフランス語訳に依拠してい

たのである。ともあれピーチャムに拠って、水泳はスポーツの上層へと押し上げられたのである。」(517・518頁)と述べている。

VI) 国王のスポーツ法令

これまで、吾が日本では余り取り挙げられず、従って余り注目されなかった 1 つの事実はジェームズ一世によって発布された「The Kings Maiesties Declaration to His Subjects, concerning lawfull sports to be vsed」(1617年ランカシア, 1618年ロンドン)なるスポーツ法令である。

この法令に関して、Diem は次の様に明示する。

「イギリス人の国民性に特徴的なのは、17世紀前半のピューリタニズムのもとですら、体育が近代的であったことである。敬虔主義者たちは聖書を引き合いに出して、『Die Plätze der Stadt Jerusalem sollen sich mit Knaben und Mädchen füllen, die auf ihren Plätzen spielen.』(またエルサレムの街路には、男の児、女の児が群がりて、巷に遊び、戯れり。旧約聖書ゼカリア書第8章5)と記述している。だから、他ならずジェームズ一世は、当時、司教モートンをして、1617年、かの『Declaration』を作成させたのであって、この法令は雑多なゲームを整理し、不法なゲームを排除したのである。この法令で、毎日曜日、教会の礼拝後に許されたのは、ダンス、男子の弓射、ランニング、跳躍、無害な『レクリエーション』、メイポール建立、それと関連したスポーツ的気晴らしであった。この法令は国教会の全ての説教壇から告知された。」(518頁)と。この法令は、1633年には、次王チャールズ一世に拠っても、再度公布をみたのである。

結

かのフランスの思想家ヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)はイギリス旅行の間、テムズ河畔で、若者たちが競走したり、乗馬したりして楽しんでいる様子を興味深く眺望した。彼は、若者たちの生き生きとした表情、新鮮な自己意識を秘めた表情に、至極感動し、まるで吾が身を「オリュンピアの祭典に置いている」様な気分になった、としている。

Diem もまた同様な感慨を内面にして、本章を記述したのではないかと推測しうる。

当時、イギリスにおけるスポーツ文化に秘められた教化力、教育力を発見し、行動し、思考した教養人は、エリオット、アスカム、マルカスター、ピーチャムなどであり、イギリス人ではないが、当地で活躍したヴィヴェスを挙げることができると共に、思考より率先実践したパブリック・スクールの生徒たち、更に、普遍化されていないが、修業中の修道士たちを挙げることができる。Diem はまずこの点を強調し、イギリスの特徴として把握する。

既に、近代初期において、若者を先達にして、老若男女共々、スポーツ文化の楽しみに耽った当時のイギリス人の生活態度に対して、為政者たちは、等しく、軍事力・武力の低迷を危惧し、楽しいスポーツの禁圧を企図し、逆に、弓射の奨励に力を注いだのである。これもまたイギリスの特徴の1つである。

Diem は、スポーツ文化としてのボールゲームでは、テニスとフットボールを挙げているが、テニスがイギリスの上流階級の子弟の教育に組み込まれたのに対して、フットボールは排除され、禁止の憂目に会った。しかし、イギリス人の底辺の間で、人気の土台の上に立ったフットボールを完全に禁止

しえず、やむなく、教会公認のものとして、祭日に許可されたのである。

トーナメントはイギリスでは、大陸程普及しなかったが、アーサー王の円卓の騎士の伝説に見られる如く、これも騎士の間では人気の競技であった。

水泳は、イギリス紳士並びにパブリック・スクールの生徒や大学生にとっては必須の一般教養であり、ディグビーやピーチャムに拠って、推奨された。

17世紀初頭、エリザベス一世の後継者、ジェームズ一世(イングランド兼スコットランド王)は、自身極め付きのスポーツ愛好者であり、子息たちにスポーツを推奨すると同時に、当時安息日の午後のスポーツ実践に反対していたピューリタン信奉者の態度に対して、「スポーツ法令」を發布して、ピューリタン派との対立を激化させたのである。

ジェームズ一世といえば、即位後の1604年から、ロバート・ドーバー(Robert Dover)の企画に成るCotswold Games(イギリスではオリュンピアン・ゲームと称する)を認可し、清教徒革命が起るまで約40年間続けられたのである。これに関しては、Diemはその視界に入れてはいなかったのである。

最後に、Diemの使用した引用・参考文献は以下の通りである。

- 1) Albrecht Wettwer : Englischer Sport im 14. Jahrhundert, Göttingen, 1933,
- 2) Wolfram Wegener : Roger Ascham als englischer Typus des geistig-sportlichen Menschen, Zeitschr. Leibesübungen, H.10/11, 1933,
- 3) Fritz Sunolemeier : Pedestrianismus, Köln, 1956
- 4) J.J. Jusserand : Les Sports et Jeux d'Exercice dans l'Ancienne France, Paris, 1901,
- 5) Wilhelm Streib : Geschichte des Ballhauses, Zeitschr. Leibesübungen, H.18, 1935.
- 6) F.P. Magoun : History of Football from the Beginnings, Bochum, 1938,
- 7) Wilhelm Brandenstein : Der Ursprung des Fussballspiels, Festschrift des Instituts für Leibeserziehung, Graz, 1954
- 8) Shakespeare : Hamlet, , 1, and , Akt, 4, Szene, , Akt, 1, Szene,
- 9) Albert de Luze : La Magnifique Histoire du Jeu de Paume, Paris, 1933,
- 10) Bruno Dressler : Geschichte der englischen Erziehung, Leipzig-Berlin, 1928,
- 11) Joseph Strutt : The Sports and Pastimes of the People of England, London, 1903,
- 12) Hans Reichardt : Colymbetes-das Schwimmbuch des Humanisten Nikolaus Weinmann aus dem Jahre 1538, Zeitschr. Leibesübungen, H.17, 1938,

参考文献

- 1) R. Ascham : Toxophilus, 1545,
- 2) 同上 : The Schoolmaster, 1570,
- 3) R. Bayne : Shakespeare's England, Vol. 1, 2, Oxford, 1916,
- 4) D. Brailsford : Sport and Society, Routledge and Kegan Paul, 1969,
- 5) T. Dyer : British Popular Customs, Ams Press, 1970,
- 6) T. Elyot : The Boke named the Governour, 1531,
- 7) D. Fenner : A short and profitable Treatise of lawfull and vnlawfull Recreations, Midlebrugh, 1590,

- 8) L.A.Govett : The King's Books of Sports, 1890,
- 9) R.Henderson : Ball, Bat and Bishop, Rockport Press, 1947,
- 10) C.Hole : English Sports and Pastimes, Libraties Press, 1949,
- 11) H.Peacham : Compleat Gentleman, 1622,
- 12) R.Mulcaster : Positions, 1581,
- 13) W.Perkins : The Cases of Conscience, Cambridge, 1606,
- 14) J.Rühl : Religion and Amusements in Sixteenth-Seventeenth-Century England, The British Journal of Sports History, Vol.1.1984,
- 15) G.Schneider : Puritanismus und Leibesübungen, Karl Hofmann, 1968,
- 16) N.Strana : The Declaration of Sports Reconsiderd, Canadian Journal of History of Sport. Vol.14.1983,
- 17) J.Strutt : The Sports and Pastimes of the People of England, London, 1810,
- 18) The Riverside Shakespeare, Harvard Univ. 1974,
- 19) P.Stubbes : The Anatomie of Abuses, London, 1583,
- 20) L.Vives : Leges Ludi. (Laws of playing) ,1539,
- 21) W.H.Woodward : Studies in Education during the Age of the Renaissance 1400-1600, Columbia, 1967,
- 22) R.Brathwait : The English Gentleman, London, 1630,
- 23) H.Günter : Um Ball und Tor, Brockhaus, 1955,
- 24) T.Marshe : The Institucion of a Gentleman, London, 1555,
- 25) 加藤元和 : カール・ディームの生涯と体育思想 , 不昧堂 , 1985 ,
- 26) 加藤元和 : Carl Diem の世界スポーツ文化史の研究(3) - 近代初期ヨーロッパの場合(2) フランス - 京都教育大学紀要 , No.106, 2005,